

飼料用米 特認品種「ちほみのり」栽培ごよみ（暫定版）

茨城県農業総合センター
令和6年1月作成

時 期	3月			4月			5月			6月			7月			8月			9月			10月			11月		
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下
作 業	催芽 播種			施肥 代かき			移植			除草剤 散布			病害虫防除 穂肥			カメムシ防除			収穫			乾燥 調製			土づくり		
生育ステージ (4月下旬 移植)	● 播種			○ 移植			▲ (活着期) 2.2~2.5葉期			△ 穂肥			◎ 出穂期			▼ (登熟期)			● 成熟期						<ul style="list-style-type: none"> ・ 堆肥の施用 ・ 稲わらのすき込み ・ 耕深15cm以上の確保 		
水 管 理				入水			浅水(活着・分けつ促進)			中干し			間断かんがい			落水											

収量・品質目標

粗玄米収量	690kg/10a
玄米水分	15.0%以下

品種特性

品種名	早晩性	草型	移植期 (月日)	出穂期 (月日)	成熟期 (月日)	稈長 (cm)	精玄米重 (kg/10a)	千粒重 (g)	耐倒 伏性	耐病性		穂発 芽性
										縹葉 枯病	葉い もち	
ちほみのり	極早生	偏穂数型	4.28	7.9	8.14	67.4	670	22.6	強	罹病性	強	やや易
あきたこまち	早生	偏穂数型	4.28	7.13	8.21	81.6	658	20.7	やや強	罹病性	中	やや難

試験データ：茨城県農業総合センター農業研究所水田利用研究室（龍ヶ崎市大徳町）平成26年成績による。

「ちほみのり」の品種特性と栽培のポイント

1. 出穂期は「あきたこまち」より3日程度早い早生品種。
2. 稈長は短く倒伏しにくい。
3. 収量は「あきたこまち」より多収。
4. イネ縹葉枯病に罹病性なので、育苗処理などをしっかり行う。
5. 「あきたこまち」より穂数はやや多い。

●育苗

- ・ 目標とする葉齢は2.2葉とする。
- ①浸種 ・水温10~15℃で積算温度は100℃以上。
- ②播種 ・一箱当たりの播種量は乾粒で160g程度とする。
- ・ 10a当たりの移植に必要な苗箱数は15~18箱程度。
- ③播種後の管理 ・温度、かん水は主食用品種に準じる。
- ・ イネもみ枯細菌病等の発生を防ぐため30℃以下で管理する。

●水管理

- ・ 2~3cmの浅水で活着・分けつを促す。
- ・ 有効茎を確保したら中干しを行い、その後は間断かんがいとする。
- ・ 落水は出穂期後30日以降、用水が早期に止まる場合には直前に溜めておく。

●収穫・乾燥・調製

- ・ 収穫適期は、穂首近くに緑色を残した籾が穂全体の10%程度になった頃以降。
- ・ 「あきたこまち」より穂発芽しやすいので、刈遅れないように注意する。
- ・ 採種する場合は、籾水分2.5%以下、回転数を15%程度落として収穫する。
- ・ 保存性を高めるため、仕上げの玄米水分は15.0%以下とする。
- ・ 種子は専用モードで乾燥し、籾水分14.5%以下にする。

●施肥

<基肥>

- ・ 基肥は、窒素成分量で10a当たり6~8kg程度を基準とし、堆肥施用の有無や地力にあわせて調節する。

<追肥>

- ・ 出穂期の25日前（幼穂長2mm）~15日前（幼穂長2cm）に窒素成分量で10a当たり3~4kg施用する。追肥は遅くならないように注意する。
- 【例1】基肥+追肥体系
基肥：6~8kg/10a+追肥：3~4kg/10a
- 【例2】全量基肥（基肥一発）体系
基肥：8~11kg/10a

●種子の準備（種子量：3~4kg/10a）

- ・ 種子消毒の有無を確認し、必要に応じて種子伝染性病害の防除を行う。

●移植

- ・ 移植適期は4月下旬~5月上旬とする。
- ・ 株間18cm（60株/坪）~22cm（50株/坪）、1株4~5本植えを基本とし、極端な疎植は避ける。
- ・ 移植が遅くなると、十分な収量が得られない可能性があるのに注意する。

●その他注意点

- ・ イネ縹葉枯病に罹病性なので、育苗箱施用剤の施用など薬剤防除を行う。
- ・ 白葉枯病に弱いため、常発地では防除を徹底する。
- ・ 障害型耐冷性は「あきたこまち」と同程度であるため、標高の高い地域での栽培は避ける。
- ・ 紋枯病の多発水田では育苗箱施用剤の施用や穂ばらみ期~出穂期に薬剤散布する。
- ・ カメムシ防除は、出穂期~乳熟期に殺虫剤を散布する。特に、周辺圃場よりも出穂が早い場合は成虫が集中的に飛来し減収する可能性があるため、必ず防除する。
- ・ 出穂以降（圃場において出穂した個体が始めて確認される時点以降）に農薬を使用する際は、籾摺りをして玄米で給餌する。ただし、この措置を要しない農薬を用いた場合には、籾米もしくは籾殻を含めた家畜への給餌が可能である。